

CONTENTS

- P1 巻頭言 初年次教育（YNUリテラシー）の全学必修化に際して
教育推進機構 副機構長 関谷 隆夫
- P2 中間期授業アンケートの試行について
教育推進機構 安野 舞子
- P4 大学教育の質保証 ⑧ BEVI導入4年目の総括2：無関心、内向き傾向を打開する
教育推進機構 市村 光之
- P8 機構ニュース



初年次教育（YNUリテラシー）の全学必修化に際して

教育推進機構・副機構長（全学教育領域担当） 関谷 隆夫

大学における初年次教育の重要性は、高等学校での履修状況や入試方法の多様化等を背景に、2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において提言された。これは、入学者の学習意欲の低下や目的意識の希薄化、大学教員が感じていた論理的思考力・表現力・主体性などの能力低下に対応するための新たな高大接続の取組として、全国に拡がったものである。高校までの学びが「与えられた問いに答える」という命題知の習得に重点を置いているのに対し、社会では「自ら問いを立てる」課題発見力と命題知を活用・実践する能力が求められるためであり、大学教育においては命題知から活用知・実践知への学習の転換が必要とされた。

本学では、2014年頃から教養教育改革WGで議論が始まり、「YNUリテラシー教育」としてアカデミック・シビック・情報の3分野の導入が検討された。アカデミックリテラシーでは、大学での学びや研究に必要なスキルに対する理解と、大学での学びと自身の将来や人生を結びつけるキャリアデザインの意識づけを目的とした。また、シビックリテラシーでは、グローバル社会で活躍するための知見や関心の育成、市民社会における心の問題とストレスマネジメントに対する理解を促すこととし、情報リテラシーでは高度情報社会で必要な情報倫理やネットセキュリティについての知識・理解の涵養を目指した。これらの内容を初年次生全員が履修する形態とし、共通の内容を持たせる方向性が示され、教材開発は高大接続・全学教育推進センター（当時）を中心に、学内機構・センターが協力して行った。2017年の全学一体学部改組に伴い各学位プログラムの授業科目内で実施する構想だったが、

導入後は授業科目外で一部を実施するなど実施方法や内容構成が異なり、初年次生に均質な教育内容を提供できていないという課題が生じた。また、3分野のリテラシー教育が、新入生オリエンテーションや基礎演習科目内で個別に実施されるなど、一体的な運用体制が確立されず、共通教材の提供と活用促進にもかかわらず教材の利活用状況や学生の学習実態の把握が不十分であった。その結果、リテラシー教育全体の実効性の検証や質保証が困難な状況となっていた。

2026年からの全学教育改革に合わせて、教育推進機構が開講責任部局となり、統一コンテンツを用いた授業の実施と受講成績の一元管理体制の構築について議論が行われた。全学統一の教育実施と質保証を目的として、「YNUリテラシー」を全学的に必修1単位科目として2026年度から導入することとなった。「大学での学びのスタートにあたり、YNUの学生として最低限おさえておくべき事柄」の教育目標は維持しつつ、導入構想から10年以上が経過し社会情勢も大きく変化していることから、以下の8つのテーマを採り上げることが計画している：①ライフ・キャリアの視点で大学生活を考える、②大学での学びを構想する、③アカデミックスキルズ、④情報セキュリティとSNSリテラシー、⑤消費者としての責任、⑥心の健康とセルフケア、⑦ダイバーシティと異文化理解、⑧学生生活における注意事項。これらのテーマで取り上げる内容の多くは一見「常識的」な内容の再確認に見えるかもしれない。学生が講義の内容を大学生活や将来の展望に適用する中で、命題知から活用知・実践知に転換する方法を身に付けていくことを期待している。

中間期授業アンケートの試行について

教育推進機構 教育開発・学修支援部門 安野 舞子

はじめに

本学では毎学期末および第1、第4ターム末に授業アンケートを実施しています。2017年度秋学期より、従来のマークシート方式からWeb（授業支援システム）による実施方式へ移行しましたが、その後、回答率の低下が喫緊の課題となっていました。そのような状況を受け、教育開発・学修支援部会では「授業アンケート見直し検討WG」を立ち上げ、回答率向上に向けて様々な視点から議論を重ねてきました。その結果の一つとして、このたび「中間期授業アンケート」を試行することとなりました。

本稿では、中間期授業アンケート試行の背景や目的、概要、そして今後の展望についてご紹介します。

中間期授業アンケート試行導入の経緯

先述のとおり、2017年度秋学期に授業アンケートをWeb化して以来、回答率は低下傾向にあり、教育改善に資する情報の十分な確保が難しい状況が続いています。以下の表は、Web化前後の回答率の推移を示したのですが、春学期と秋学期で差はあるものの（春学期の方が高い傾向）、マークシート方式だった頃の60%台と比較すると、低下が顕著であることがわかります。

	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
春学期	66.6%	65.4%	43.5%	38.9%	36.3%	30.1%	22.7%	26.8%	28.1%	24.2%
秋学期	61.6%	47.3%	38.2%	33.3%	28.3%	24.4%	21.8%	22.5%	21.3%	—

この課題を受けて、2022年度に「授業アンケート見直し検討WG」を設置し、回答率向上に向けた検討を開始しました。同年度秋学期には、学生プロフィールを活用し、全学部生を対象に授業アンケートに関する調査を実施しました。その結果、授業アンケートに回答する／しない理由について、以下の傾向が明らかになりました。

- ・回答する学生の理由：「授業内で教員がアンケートの意義を説明し、回答を促したから」「授業内で回答時間が設けられたから」
- ・回答しない学生の理由：「うっかり忘れて回答期限が過ぎていたから」

また、授業アンケートへの回答を促す効果的な方法について選択肢を設けて尋ねたところ、最も多かったのは「授業時間内に回答時間を設ける」（60.7%）であり、一方、「アンケートを実施する科目数を減らす」と回答した学生は全体の6%にとどまりました。

この結果を踏まえ、各部署の教授会等で実施しているFDセミナー等で「授業時間内でのアンケート実施」を周知してきましたが、回答率改善にはなかなか結びついていませんでした。

そのような中、2024年12月に開催された、横浜市内4大学（神奈川大学、関東学院大学、横浜市立大学、本学）による「ヨコハマFD・SD連絡協議会」では、授業評価アンケートをテーマに意見交換が行われ、学生を交えた議論で以下の論点が注目されました：

- ・多くの学生がアンケートの目的を理解しておらず、メリットを感じていない
- ・学期末ではなく、中間期にアンケートを実施すれば、学生も改善の恩恵を感じやすい
- ・量的なアンケートよりも質的なコメントの方が有用

これらを踏まえ、WGでは「教員が授業実施期間中に改善に活用でき、学生も効果を実感できる」中間期授業アンケートの導入を提案し、教育開発・学修支援部会（10月3日）、教務厚生部会（10月27日）において試行が承認されました。

中間期授業アンケートの目的

本アンケートは、セメスター科目の中間期に受講学生から率直な意見を収集し、必要に応じて授業内容や進め方を改善することを目的としています。これにより、学生の学びをより効果的に支援するとともに、教員にとって授業運営を振り返り、改善点や工夫の余地を把握するための実践的なフィードバックを得る機会となります。

従来の学期末アンケートでは、学生たちは回答しても自らがその改善の恩恵を受けられないと感じるため、回答意欲が削がれる傾向がありました。その結果、回答数が伸びず、授業改善に必要な意見の蓄積が十分に得られないという課題がありました。中間期にアンケートを実施することで、学生が「意見が反映される」という実感を得やすくなり、より積極的かつ建設的な回答が期待で

きます。

教育開発・学修支援部門では、この目的を実現するためのツールとして「中間期授業アンケート」を全学的に提供いたします。教員の皆さまには授業改善の一助としてご活用いただき、学生との双方向的なコミュニケーションを通じて授業の質向上を推進していただくことを期待しています。

試行概要

実施時期（推奨）：2025年11月18日（火）～12月1日（月）

※第4ターム授業アンケート実施期間と同一

対象：秋セメスターの授業アンケート対象科目

※ただし、実施は任意

方法：授業支援システムを通じて実施

アンケート内容：

教示文

このアンケートは、授業をより良くするために、学期の途中で皆さんからの率直なご意見を伺うことを目的としています。

いただいたご意見は今後の授業運営の参考といたしますが、すべての要望に対応できるわけではないことをあらかじめご理解ください。

また、不適切な表現や他者を不快にさせる言葉は避け、授業改善につながる前向きなご意見をお願いします。

問い合わせ先：教育推進機構 aec-fd@ynu.ac.jp

設問と選択肢

Q1 この授業について、理解を深めるために予習や復習などの学習を行っていますか。

- ☐ 積極的に行っている
- ☐ ある程度行っている
- ☐ あまり行っていない
- ☐ ほとんど行っていない

Q2-1 授業の内容は理解できていますか。

- ☐ よく理解できている
- ☐ おおむね理解できている
- ☐ あまり理解できていない
- ☐ ほとんど理解できていない

Q2-2 Q2-1について、理解できていない点や不明な点があれば具体的に教えてください。

（任意・1,000文字以内）

Q3 その他、授業について（資料・課題など）ご意見があれば記入してください。

（任意・1,000文字以内）

Q4 以降：担当教員が任意で設問追加可能

今回の設問項目のポイントは、昨年（2024年）12月に開催された「ヨコハマFD・SD連絡協議会」での意見交換で示された論点「量的なアンケートよりも質的なコメントの方が有用」を踏まえた点にあります。具体的には、授業の内容が理解できていない場合に、どの部分がどのように理解できていないのかを受講生に記述してもらうことを重視しています。このことにより、必要に応じて授業の見直しや改善が行えることを期待しています。

また、「授業の内容は理解できていますか」と尋ねる前に、「この授業について、理解を深めるために予習や復習などの学習を行っていますか」と質問することも重要なポイントです。なぜなら、自ら十分に学修していない場合、理解できないのは当然であり、きちんと学修していてもなお理解できない部分があるのであれば、その部分には教える側の改善の余地があると考えられるからです。

なお、今回の試行への参加は任意となっています。実施期間の約1週間前に、秋セメスターの授業アンケート対象科目のLMS上に「YNU中間期授業アンケート」フォルダが自動登録されますが、フォルダは初期設定で学生には非表示となっています（公開日：2024年11月18日）。そのため、今回の試行に参加されない教員の皆さまには特別な操作は不要であり、フォルダをそのままにいただいて問題ありません。

今後の展望

授業アンケート見直し検討WGの議論では、「教員個別で実施可能なことを全学で行う必要があるのか」という疑問もありました。しかし、実際にそのように実施している教員は一部にとどまっている現状を踏まえ、全学としてツールを提供し、授業の質向上に向けた取組みの気風を醸成することが重要であるとの結論に至り、今回の試行に至っています。

2025年2月に文部科学省が取りまとめた「我が国の『知の総和』 向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」を受け、認証評価をはじめとする高等教育の質評価のあり方は大きく変わろうとしています。現状維持の「質保証」から「質向上」への転換が求められる中、中間期授業アンケートの試行は、こうした社会的ニーズに合致した取組みといえます。

次年度以降の本格実施を検討するため、試行に参加された先生方に対し、教育開発・学修支援部門からヒアリングをお願いする予定です。その際には、この中間期授業アンケートを実施してどのような利点があったか、学生の反応はどうだったかなどをお聞きし、効果を検証していきたいと考えています。その意味でも、一人でも多くの教員の皆さまに、今回の試行にご協力いただけますようお願い申し上げます。

大学教育の質保証 ⑧

BEVI導入4年目の総括2：無関心、内向き傾向を打開する

教育推進機構 学生IR統括部門 市村 光之

本学では、心理アセスメント：BEVI (Beliefs, Events, and Values Inventory) を全学部・大学院に導入し、秋学期の学生プロフィールの入力時に実施しています。なお、BEVIは主に留学等の海外研修プログラムの効果測定ツールとして注目され、全国70以上の大学で活用が進んでいます。他方、BEVIは異文化間能力に留まらず、思考や行動の基盤となる根底的なものの考えかた、感情、潜在欲求などを含め、受検者本人が自覚しにくい信念や価値観などを多角的に可視化できるツールです。これまで学生プロフィールにより学生に提供してきた学士力と就業力の可視化を補完し、学生が自分自身の心の有り様を自覚し、主体的な学びの姿勢を強化するためのツールになると判断し導入したものです。

BEVIは2024年度に導入から4年目を迎えました。前回のニュースレターでは、BEVI導入時（2021年）の1年生が4年生となったことから、その総括として3年間のスコアの変化を集計・分析しました。その結果、グローバルに活躍できる人材が求められる社会状況の中で、大学生生活を通じて学生たちが他者や世界との関わりに無関心で

内向き傾向になっている現実が明らかになりました。

学生プロフィールによる意識・行動調査においても、「教員、学生と自ら進んで交わり見聞を拓げる意識」と「多様な文化を知る行動」がコロナ禍により大きく減退し、回復基調にあるもののコロナ禍前の水準にはいまだ戻っていません。無関心および内向き傾向は、上述の4年生に限らず全学年に共通します。この傾向は本学の学生のみに留まらず、他大学も同様と推察します。さらには、昨今の政治・国際情勢における「自国ファースト」の流れを踏まえると、全世界的な傾向であり、由々しき課題でもあります。

今回のニュースレターは、BEVI導入4年目の総括の第2弾です。他者や世界との関わりに無関心で内向き傾向になる構造を、BEVIが測定する17個の尺度の相互関係から報告します。本学におけるグローバルに活躍できる人材の育成の手がかりになればと考えています。

BEVIの各尺度

BEVIが測るのは思考や行動として外部に発揮される

図1：BEVIの尺度（スケール）と意味（赤字スケールのスコア：低いほうが望ましい）

7つの領域	17のスケール	解説	資質・能力例
① 形成的指標	1. Negative Life Events 人生におけるネガティブな出来事	困難な子ども時代；両親が問題を抱えていた；日常的に葛藤がある；多くの後悔など、思考や行動の源にあるものを表す	自己受容性、自尊感情
② 中核的欲求の充足度	2. Needs Closure 欲求の抑圧 3. Needs Fulfillment 欲求の充足度 4. Identity Diffusion アイデンティティの拡散	不幸な生い立ち、経歴；いさかいの多い、崩壊した家庭；ステレオタイプの思考、不合理な信念 経験、欲求また感情に対してのオープン性；自己、他者また広い世界に対する気遣い、思いやり アイデンティティの危機；結婚、家族生活に関する辛い出来事；自分や将来に対する「悔やまれる」感情	自己のアイデンティティ、自己肯定感、開放性、客観的思考、公正な判断
③ 不均衡の許容	5. Basic Openness 基本的な開放性 6. Self Certitude 自分に対する確信	基本的な思考、感情また欲求について、オープンで正直である 強い意志；困難を理由とする弁明を許容できない；ポジティブ・シンキングを強調する；深い分析を好まない	開放性、レジリエンス、分析力、自己効力感
④ 行動の動機	7. Basic Determinism 基本的な決定論 8. Socioemotional Convergence 社会情動的一致	差異、行動について簡単な説明（白黒をつけやすい）を好む；人は変わらない、強い意志が生き残るとの確信；問題を抱えた生い立ち 自己、他者、世界に対してオープンであり、考えている；思慮深い、実用主義、強い意志；自立欲求がある一方で傷つきやすい。他者の立場で考えられるなど、世界をオールオアナッシングでとらえない	批判的・論理思考、課題発見・解決能力、分析力、複眼的視野、開放性
⑤ 自分自身や自分の考え、感情、欲求	9. Physical Resonance 身体的共鳴 10. Emotional Attunement 感情の調整 11. Self Awareness 自己認識 12. Meaning Quest 意味の探求	身体的欲求、感情に対する受容性；経験主義；人間の本质、進化の影響に対する評価 感情に動かされやすい、傷つきやすい、社会的、愛情を求めている、親和的、愛情表現に価値を置く、家族関係が親密 内省的傾向；自己の複雑性を受け入れる；人々の経験、状況の差異を気遣う；難しいまた議論のある思考、感情を許容する 意味を模索する；人生のバランスを求める；柔軟、根気強い、とても感じやすい、恵まれない人々への気遣い	主体性、自己統制力・自律心、好奇心、探求力、創造力、柔軟性
⑥ 他者との係わり	13. Religious Traditionalism 宗教的伝統主義 14. Gender Traditionalism ジェンダーの伝統主義 15. Sociocultural Openness 社会文化的オープン性	非常に宗教的である；自己、行動、出来事を神・仏・至高の存在の力によるものと考え；「来世」へ傾斜 男性と女性はある型に作られている；伝統的、単純なジェンダー論およびジェンダーの役割を好む 文化、経済、教育、環境、ジェンダー、国際関係、政治に関する様々な行動、政策また実行について進歩的、オープンである	異文化理解、多様性への寛容、柔軟性、倫理観
⑦ 世界との係わり	16. Ecological Resonance 生態との共鳴 17. Global Resonance 世界との共鳴	環境・サステナビリティ問題に深く傾倒している；地球、自然界の運命を懸念している 様々な個人、集団、言語、文化について学習することまた出会うことに傾倒している；世界への関与を模索している	異文化理解・適応力、チャレンジ精神、チームワーク、コミュニケーション力、責任感

スキルではなく、思考や行動の奥にある資質です。前頁の図1の17個の尺度に分けて、世界標準に基づきスコアが算出されます。各尺度のうち、番号が若い方はより中核的な（人の考え方や価値観の土台となる）資質であり、後半はその中核的な資質群に基づいて形成され、外に表れる行動やスキルに直接つながる資質になります。各尺度は相互に関連していますので、個々の尺度の数値の意味は、他の尺度のスコアとの関係を含めて考えることでより適切に理解できます。

BEVIの各尺度の相互関係

BEVI日本語版の開発元である広島大学名誉教授・西谷元氏より個人情報情報を伏せた本学の受検結果の素データ入手し、それぞれの尺度の関連性を確認しました。留学生を含む2024年度全学部受検者2539名（受検率35.1%、男女比 6.6 : 3.4）のデータから17個の尺度間の相関係数を算出し、主要な相関関係をマッピングしたのが図2です。

尺度3を起点に尺度8を経て尺度15と17に行き着く流れが最も強く、同じく尺度3を起点に尺度10～12への流れも強いことがわかります。自分にとって好ましがらざる状況に直面した時の本質的なリアクション（尺度3）を起点に、自分の感情や思考を調整したり深めたりしつつ（同10～12）、自己と社会との係わりを捉える（同8）という構図です。その捉えかたが、社会や文化に対するオープンさ（同15）や異文化を理解・受容する資質（同17）の度合いに強く影響し、態度として外部に表出するのでしょうか。

この構図を踏まえると、社会に対するオープンさや異

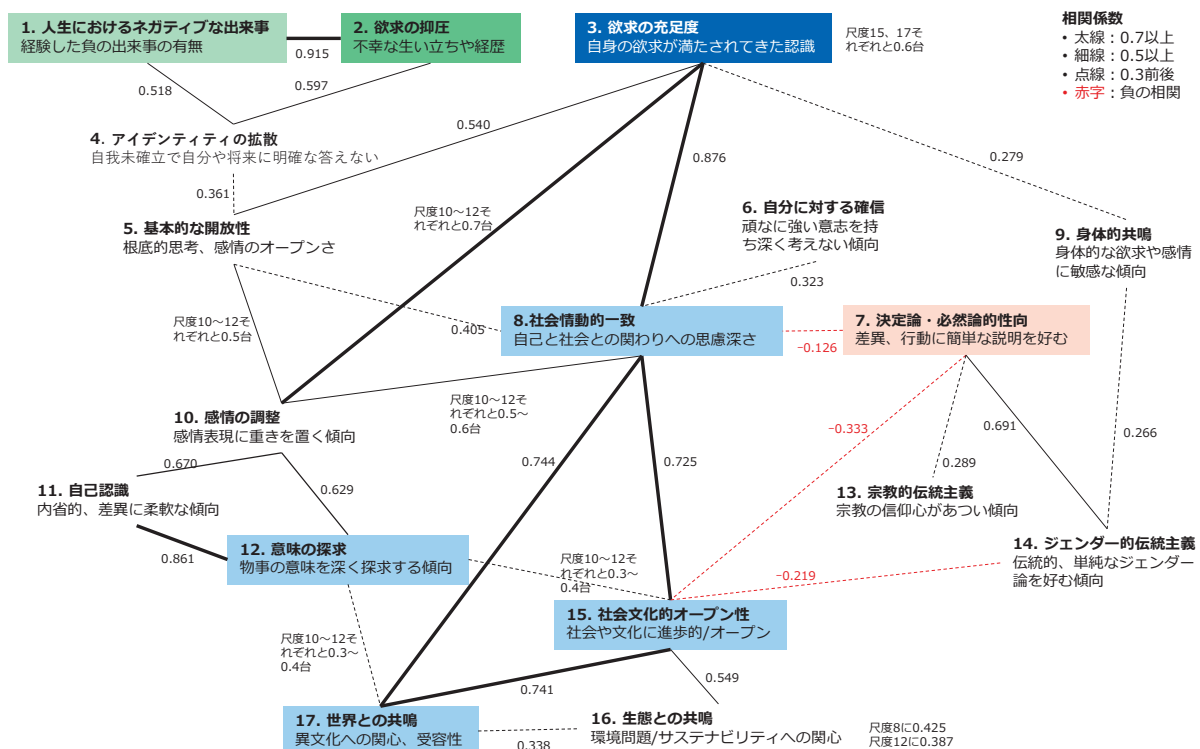
文化を受容する資質を滋養するためには、異文化に触れる機会を学生に提供するだけでは不十分です。異文化に遭遇した際、うまく適応できる人、戸惑う人、拒絶する人などさまざまでしょう。異文化という好ましがらざる状況に直面した際に拒絶または無視、回避するのではなく、自分の感情と折り合いをつけつつ必要に応じて自分の価値観や考えかたを修正し、よりよい関係性の構築を目指して柔軟に思考する資質、つまり尺度8と尺度10～12を鍛える教育上の仕掛けが求められるのではないのでしょうか。

図2では、尺度1、2から尺度4、5を経て10～12にも繋がっています。子供時代の不幸な出来事や経験（尺度1、2）が自我（同4）や根底的な考えかた（同5）に作用し、自分の感情や思考の調整（同10～12）に影響を及ぼしています。尺度10～12には、上述の尺度3が強く作用していますので、幼児体験とその捉えかたが自分の感情や思考のあり様を左右すると解釈できます。なお、尺度1、2と尺度3の間には目立つ相関はみられません。

データマイニング手法による分析から

前項の2024年度全学部受検者のデータについて、統計解析ソフトのRを用いて、データマイニング手法による分析を試みました。異文化間能力の主要な指標である尺度17に影響する尺度を特定できれば、尺度17を改善・強化する方策を検討する基礎資料になります。そこで、分類の対象となる尺度（基準変数）の量的な違いを別の尺度（説明変数）によって説明する決定木分析により、尺度17に影響を及ぼす尺度を辿りました。紙幅の都合で図は示

図2：BEVIの各尺度の相関図



しませんが、尺度17（基準変数）の量的な違いに直接影響を与える尺度（説明変数）は尺度8と15です。尺度15に影響を与えるのは主に尺度8で、尺度8に影響を与えるのは尺度3です。前項で述べた尺度3→8→15、17への流れと一致します。尺度3、8、15をいかにして好ましい方向に改善するかが尺度17の向上のカギになるのです。

次に、BEVIの測定結果に表れた傾向の類似性によりグルーピングし、各グループの特徴を確認するため、大量のデータを同傾向の群に分類するクラスター分析を試みました。その結果を整理したものが図3です。尺度1ネガティブな出来事および2欲求の抑圧の度合いと、尺度3欲求の充足度の高低の組み合わせで4つの群に分類されます。尺度1および2と、尺度3に関する4群の位置関係は図4の通りです。前項で述べたように尺度3が起点になっていることと考え合わせると、過去の体験（尺度1、2）をどう捉えるか（尺度3）がその人の思考や行動の方向性を左右することになります。

4つの群により、最終的に尺度15と17の数値が分かれます。それぞれの分布は図5、6の通りです。尺度15、17ともにD群が最も高く、A、C群が最も低いです。各群の平均値および分布の差は、尺度16よりも17のほうが大きいです。

以上の結果から、尺度15、17の源流、つまり社会的オープンさや異文化受容性の度合いに影響を与えるのは尺度3および尺度8と言えます。学生たちの社会や他者への無関心、内向き傾向を改善する糸口はここにありそうです。

各尺度の意味と作用から

最近、BEVIにはBEVIに関する文献等を読み込ませた生成AI機能「Being BEVI」が搭載され、測定結果の意味をより深く理解できるようになりました。同機能を用いて尺度3、8の意味と作用について確認した結果を要約したのが次頁の図7です。

尺度3のスコアはその高/低で単純には割り切れません。高/低それぞれに両義性がある、プラスに働くこともあればマイナスに働くこともあります。尺度8は高スコアのほうが概して好ましいのですが、低スコアであっても「既存ルールに従う」資質は状況によりプラスに働くこともあるでしょう。幼児体験とそれに伴う葛藤およびその克服の状況は、生い立ちや生育環境、受けてきた教育、してきた経験などにより千差万別ですので、尺度3がどのように作用するかは人によります。尺度1および2と、尺度3の間に相関がみられないのはそのためと推測できます。つらい体験の有無そのものよりも、幸・不幸を問わず、これまでの体験を踏まえ困難な現状をどうしたいと考えるか、によりその後の思考や行動が方向付けられるのです。尺度3と8のスコアの相関は強いですが、自分と異なる価値観や好ましくない状況をどう捉えるか（尺度8）は、尺度3が個々人にどのように作用するかによります。

クラスター分析した図5、6の各群の分布に幅があるのは、尺度15、17に至るまでの各尺度の作用が人による

図3：全尺度の値のクラスター分析結果

群	R1,2	R3	尺度4～14の比較	グループの特徴	R15、17	比率
A	高	低	ネガティブ・抑圧経験が多く、欲求も不充足 ・5：基本的な開放性はやや高 ・8：社会情動的一致は 低 ・10～12：感受性や思慮深さは やや低 ～中	尺度1、2の葛藤を前向きに転換できていない⇒自分への正直さはあるものの、他者や社会へのオープンさ、思慮深さが全般的に低い	(平均) 15：17.1 17：19.1	25.8 %
B	高	高	ネガティブ・抑圧経験が多いが、欲求は充足 ・5：基本的な開放性は 著しく高 ・8：社会情動的一致は中 ・10～12：感受性や思慮深さは 高	尺度1、2の葛藤を克服し、前向きになれた結果か？⇒自分への正直さは強くあり、他者や社会へのオープンさ、思慮深さがある	15：30.2 17：43.0	19.3 %
C	低	低	ネガティブ・抑圧経験が少ないが、欲求は不充足 ・5：基本的な開放性は やや低 ・8：社会情動的一致は 低 ・10～12：感受性や思慮深さは 低	尺度1、2の葛藤はないが、何かの要因で前向きになれない⇒自分への正直さが低く、他者や社会へのオープンさ、思慮深さが全般的に低い	15：16.5 17：22.7	37.9 %
D	低	高	ネガティブ・抑圧経験が少なく、欲求も充足 ・5：基本的な開放性はやや高 ・7：決定論・必然論的性向は 中 （他グループは高） ・8：社会情動的一致は中 ・10～12：感受性や思慮深さは 高	自分への正直さがあり、ものの見かたは他Gに比べ柔軟で、他者や社会へのオープンさ、思慮深さがある	15：45.8 17：64.4	19.3 %

図4：4群の位置関係

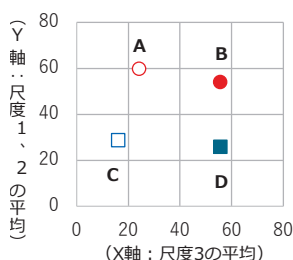


図5：尺度15の4群の分布

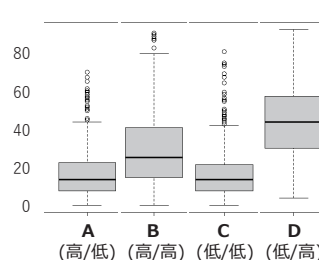


図6：尺度17の4群の分布

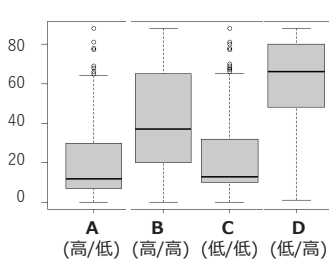


図7：Being BEVIによる尺度3、8の説明（要約）

尺度3 欲求の充足度：逆境に直面したときの核心的なニーズへの影響を評価する	
高スコア ：ストレスや逆境時に不確実性や曖昧さを好まず、明快な答えや解決策を得ることに固執する (+) 決断力があり、迅速・明確な意思決定ができる (-) 他者や自分の弱さへの共感に欠け、人間関係やチームワークに影響を与える	低スコア ：ストレスや逆境時に不確かな状況でも快適に感じられ、結論に到達することに固執しない (+) 不確実性や複雑な状況に対して柔軟に応じる適応力を発揮する (-) 場合によって決断力に欠け行動が遅れる
尺度8 社会情動的一致：複数の感情的または社会的視点をどの程度統合できるかを示す	
高スコア ：異なる人々の感情や立場に共感し、複雑な感情的・社会的状況に適応し理解する能力がある (+) 異なるバックグラウンドや視点をうまく統合し、共感を持って接することができる	低スコア ：単純で直接的な感情的反応や社会的見解を好み、多様な視点の統合が苦手な傾向がある (-) 複数の視点を調和させるのが難しいと感じる (+/-) 従来の枠組みや既存ルールに従うことを好む

ためでしょう。尺度15より17のほうが各群の平均値が高く分布が広い理由については、本結果からは説明できませんが、社会的なオープンさの度合いにより、増幅されて異文化の受容性の度合いに表われると推測できます。

クラスター分析の4群の特徴を一義的に整理するのはやや無理がありますが、最大公約数的に整理すると次のようになります。

- ・ A/C群：つらい経験が多く、それらを克服するに至っていない人（A群）、つらい経験が少なくても何らかの要因で前向きになれない人（C群）は、他者や社会、異文化に寛容に対応できない。
- ・ B群：つらいことを多く経験してきても、それらの葛藤を克服して前向きになった人は他者や社会、異文化にやや寛容に対応できる。
- ・ D群：ネガティブ・抑圧経験が少ない人のほうが、他者や社会との差異を柔軟にとらえることができ、社会や異文化に寛容に対応できる。

無関心、内向き傾向を打開するために

筆者が担当する異文化理解科目では、①開講時（10月）、②終講時（翌年1月下旬）、③履修翌年度の10月にBEVIを受検させています。尺度17の平均値は、①開講時の46.2から②終講時には59.8と飛躍的に向上しますが、③終講から8か月後には48.5に下降し、定着していません。その要因について本ニュースレターの前号（Vol.23）では、終講後の継続学習がないためと推測しました。今回の分析を踏まえると、尺度17に繋がる尺度3→8→15の流れを意識した授業設計が不十分だったことが、定着しなかったもう一つの要因として考えられます。海外研修プログラムや国際共修科目も、同様の課題があるのではないのでしょうか。

異文化に接した際の反応は学生によりさまざまです。学生個々人と面談してアドバイスするのが理想です。しかし、授業や多人数の海外研修プログラムで個別対応は難しいでしょう。何かよい方法はないのでしょうか？ 今後の課題です。

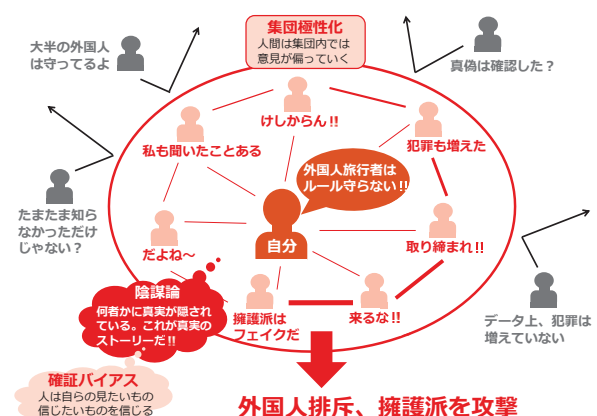
他者や社会にオープンであることと、異文化に寛容であることは、グローバルに活躍できる人材の要件となる

資質であるだけでなく、学問における真理探究の基となる資質であり、人格の陶冶そのものでもあります。また、異文化に対応する資質は、日本人同士の関係においても同じです。グローバルに活躍できる人材要件を追求すればするほど、特別な資質ではなく、大学教育で本来培うべき基本の資質を身につけさせことに尽きる、という原点に戻ります。

内向き傾向や異文化理解への意欲減退傾向の要因として学生が第1に挙げたのは、SNS等のネット情報の影響です（前回のニュースレター Vol.23）。コロナ禍の中でSNSの利用が拡大し、自分の趣味・志向に合う情報だけが表示される世界（フィルターバブル）の中に、知らず知らずのうちに入り込んでしまいます。さらにSNSコミュニティの中では、図8のように、自分に似た興味関心の人々が集まり、場合によって偏った思想や意見が増幅され（エコーチェンバー現象）、より客観的で妥当な意見が受け入れられなくなりがちです。そうしたSNSの弊害は、7月の参議院選挙を含め、各所に出始めています。学生をSNSの虜にさせないために、日本社会を間違った方向に進ませないためにも、学生の内向き傾向の打開策を真剣に議論したいところです。

図8：SNSのエコーチェンバー現象

- ・ 外国人観光客に対するネガティブ印象が増幅される例
- ・ エコーチェンバーが集団極端化により増幅
- ・ 陰謀論によりさらに先鋭化し、直接行動にエスカレート



機構ニュース

開催案内 2025年度 横浜4大学「ヨコハマFD・SD連絡協議会」

本学は、横浜市内にある3つの大学(神奈川大学、関東学院大学及び横浜市立大学)とFD・SD活動の連携に関する包括協定を締結し、FD・SDに関わる取り組みを進めています。その一環として、例年12月に各大学の取り組みを広く公開する「ヨコハマFDフォーラム」を開催してきましたが、昨年度より、4大学連携の原点である「連絡協議会」形式で実施することとなりました。

本協議会は、4大学のFD・SD関係教職員を主な参加者とし、従来のフォーラム同様、学生も交えて、各大学のFD・SD活動や授業評価等に関する現状や課題を共有し、改善・解決に向けた方策の検討や、今後の連携に向けた協議を行う場とすることを目的としています。

今年度は本学が幹事校となり、4年ぶりに本学キャンパスで開催します。

開催日時：2025年12月13日（土）14：00～17：30

開催場所：横浜国立大学 常盤台キャンパス

対象者：4大学の教職員および学生

テーマ：初年次教育について考える—大学での学びのスタートを支える仕組みとは—

開催趣旨：

近年、大学教育において初年次教育の重要性がますます高まっています。高校から大学への移行期にある学生に対し、大学での学びに必要な基礎的な力を育成し、主体的な学修姿勢を確立させることは、専門教育への円滑な接続のみならず、学生の成長とキャリア形成においても極めて重要です。

本協議会では、「初年次教育について考える—大学での学びのスタートを支える仕組みとは—」をテーマに、4大学のFD・SD関係教職員および学生を主たる参加者とし、それぞれの大学が実施している初年次教育の取り組みを共有・比較しながら、教育内容や実施方法（全学的な取り組みか・学部単位か、オンラインか・対面か等）における違いや共通点を認識し、より効果的な初年次教育の在り方について議論を深めます。

各大学における初年次教育は、大学全体で共通して実施されるプログラムと、学部ごとの専門教育に繋がる導入的な科目の両面を持ち合わせており、そのバランスや役割分担も重要な検討課題です。本協議会を通じて、初年次教育の理念と実践を再確認し、今後の教育改善に向けた知見を共有する場にしたいと考えています。

本号の巻頭言でも触れたとおり、本学の初年次教育（YNUリテラシー）は次年度より全学必修化となります。全8回のオンデマンド型授業として実施予定であり、各回のテーマや教材内容の検討を進めていますが、本協議会での他大学での事例やグループディスカッションでの意見を踏まえ、より充実した初年次教育プログラムを構築していきたいと考えています。

本学の教職員・学生であれば、どなたでもご参加いただけます。ご関心のある方はぜひご参加ください。参加募集の詳細は、11月中旬に各部局を通じてご案内します。

— 教育推進機構からのお知らせ —

【2025年度秋学期授業アンケートの実施について】

第4ターム：2025年11月18日（火）～12月1日（月）

第5ターム／秋セメスター：2026年1月20日（火）～2月16日（月）

※授業アンケート実施対象科目は、ゼミ、教育実習、卒業研究関連科目を除く、履修者10名以上の科目となります。対象科目であれば、授業支援システムの講義編集画面に自動的に登録されます。万が一、対象科目であるにも拘らず講義編集画面にアンケートフォームが表示されない場合は、教育推進機構までメールにてご連絡ください（aec-fd@ynu.ac.jp）。

【学生IR、FD活動の報告書類の公開】

学生の学修・生活行動の分析結果や卒業・就職先調査結果など、各種学生IRおよびFD関連の情報は、関連する会議体や教授会でのFDセミナーにおいて報告しておりますが、よりタイムリーに関係各部局に展開すべく、サイボーズ内に公開フォルダを設け、関係各部局にて適宜参照・入手できるようにしています。必要に応じて学生サポートや教育改善にご活用ください。

■ 格納先：サイボーズ> ファイル管理 > 教育推進機構

■ 提供文書の取り扱い：学内限定公開(本学教職員のみ)を含みます。学内限定公開文書のダウンロード後の取り扱いについてはご配慮ください。



横浜国立大学 AP/FDニュースレター 第24号（通号50号）

発行：令和7年（2025）年11月 編集・制作：教育推進機構

Email：aec-fd@ynu.ac.jp ホームページ：www.yec.ynu.ac.jp